日雇い労働者のまちだった釜ヶ崎も変貌し、いまや単身高齢者のまちと化した感がある。そして、間もなく、否、いま、「ホームレス」ならぬ「介護レス」の不安がこのまちを包み込もうとしている。ボクは、この「変貌」と、このまち特有の「不変」とを対比させながら、悶々としてきた。「不変」とは、「する側」から見れば「対処療法」、「される側」から見れば「翻弄」とでも言うべき、もう半世紀以上に亘って繰り返されてきた「社会のまなざし」のことである。 その昔、人々は「片道切符」でこのまちにやってきて、建設現場などで働いた。このまちは、ある時は「ドヤ」を提供し、またある時は「アオカン」を強いたが、彼らはずっと「仕事レス(半失業状態)」だった。そして、歳月が流れ、彼らは一様に老い、病み、このまちは、生活保護を提供したが、「ホームレス」も強いた。そして、いま、彼らは、家族も施設もないまま「介護レス」におののいている。ずっと「片道切符」で、「対処療法」の駅を辿りながら、ある時は「手配師」、またある時は「ブラックマーケット」に「翻弄」されてきた。この3月、群馬県の静養ホームたまゆらで焼け死んだ高齢者たちは、大阪と東京という違いはあっても、同じ境遇を辿って犠牲になった人たちだった。

ボク達は、このまちに、12 月、コミュニティハウス萩を竣工させる。「仕事レス」「ホームレス」「介護レス」、その境遇は変わっても、変わらぬ「対処療法」に「翻弄」され続けてきた彼らの人生と、彼らへの「社会のまなざし」を見つめ直してみる手助けをしたいという試みだった。片道切符の終着駅から、往復切符に代えて、もう一度旅してみたい。その旅の道程が、このまちの再生にヒントを与えると思った。

ボクは、もう１０年も前のこと、「定住社会」のはずの同和地区で、人口の２割の人々が流動するさまを、「困難の一方通行」と評した。この１０年、ずっとこのテーマを見つめてきたが、思わぬことに、そのテーマが釜ヶ崎に、あるいは密集市街地などにも共通していることを知った。ボクは、それを「複雑系都市社会問題」と規定した。経済や福祉、そして差別や排除が時を刻んで織りなしてきた「混沌」が、旧来の「秩序（福祉）」に代わる新しい社会システムを希求し、人々（社会的運動）をかき立てるという意味である。

コミュニティハウス萩は、１２月２日、「１人暮らし高齢者多住地域の住まいと福祉」というテーマのシンポジウムで、旅路に発つ。

㈱ナイス代表取締役 冨田一幸

hidarimaki の逸曲

アナログレコードの逆襲その30（最終回）

アルバム「俺らいちぬけた」から

岡林信康／「堕ちた鳥のバラード」

岡林信康の興味深いところは、シリアスさとブラックな笑いを歌う両面性が、すぐれて聞く者を圧倒するところにある。とくに71年に発表した彼の第3作目のアルバム「俺らいちぬけた」はそんな作品が詰め込まれた作品といえる。

―その日／空は／すごい黄いろで／そして／最後の暗殺が終わった／あんたの街の広場の隅で／二つの影がねじれて踊る／ひとりの斧が／ひとりの額に／それで全部／すっかり終わった／あれからこっちは／あれからこっちは―。

この曲はA面冒頭「堕ちた鳥のバラード」の一節だ。東京の小劇場「黒テント」の演出家である佐藤信（さとうまこと）が作詞し、岡林が作曲をした劇中歌をアルバム最初に挿入したのである。ヘビーで暗示的な内容を持つこの曲は、乾いたシュール感ととてつもない不気味さを秘め、迫力のあるハードロックに仕上がっている。

対照的に皮肉な笑いを誘う「いくいくお花ちゃん」はA面2曲目で、これもまた作詞が佐藤、作曲が岡林で前出「黒テント」の劇中歌で歌われた。

―死んでますか／死んでませえん／死ねますか／死ねませえん／おいたわしやの／百万遍／泥道花道女道／今日もまた／大やけくそ／ひねもすのたりの／時かいな／わが幻のお花ちゃん／それでもがんばるお花ちゃん―。

ところでこのアルバムは、岡林の生活志向が明確にあらわれた一作だと思う。A面最後のアルバムタイトルにもなった「俺らいちぬけた」は、田舎生活から都会へ、そして再び田舎に回帰する青年の逡巡が生真面目に歌われる。実生活でも岡林は田んぼを耕す田舎生活に隠遁し、フォークの神様を捨てた。僕も同時期、都会脱出を試みて大失敗し大損したことがあった（僕には神がついていなかったのだ！）。そしてこの曲がB面全体へのイントロにもなっている。というのも、B面すべてが自然賛歌というか、今でいうエコロジーの文脈で構成されていて、当時の岡林のライフスタイルがにじんでいる。

とくに「偉いもんだよ人間は」とか「毛のないエテ公」などコミカルさを歌う岡林のリズム感や、曲と曲との間に発する合の手は抜群である。ちやほやされた音楽業界に見切りをつけ、田畑に暮らす生活を始めた彼の日誌のようなレコードなのだ。今は〝自然にやさしい〟などと気味の悪いコマーシャルが幅を利かせているが、この頃岡林は一足早くエコロジーに目覚めていた。僕はそんなスタイルに共鳴していた。

hidarimaki

「hidarimaki」のこの逸曲」は今号で終わります。2年の長い間にわたりご愛読をいただきありがとうございました。新年1月号からは「hidarimaki」のこの逸編」として映画をテーマに登場する予定です。どうぞお楽しみに。